

氏名	西国領 君嘉
ヨミガナ	ニシコクリョウ キミカ
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第262号
学位授与年月日	平成27年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 吾妻流の再興と展開 ～初代吾妻徳穂の舞踊活動を中心に～ 〈演奏〉 清元 梅の春 長唄 鷺娘

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	准教授	（音楽学部）	露木 雅彌
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	武田 孝史
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	萩岡 松韻
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	杉本 和寛

（論文内容の要旨）

本論では、現在の日本舞踊界の礎となっている新舞踊運動と、その背景にある事柄を取り上げ、その中でも、歌舞伎の表現技法である「女形」から、女性が女性を表現する「女の踊り」として娘形を確立させた初代吾妻徳穂に主眼を置いた。

その初代徳穂とは、初代花柳寿美に憧れ、昭和5年に活発となった新舞踊運動に身を投じた女性舞踊家の一人であるが、まず新舞踊運動とは、坪内逍遙に触発され興った運動である。その背景には明治37年に出版された『新楽劇論』があり、この逍遙の意を継ぐべく、初代藤蔭静枝が狼煙をあげ、初代五條珠實、初代花柳寿美を含めた三人の女性舞踊家が先駆けとなり、その後進として、西崎緑、藤間勘素娥、藤間喜与恵、水木歌紅、藤間春枝が舞踊家の道を辿ることとなる。この中の藤間春枝こそが、後の初代吾妻徳穂なのである。

徳穂は、新舞踊運動で活躍する女性舞踊家の中でも、一線を画している。それは、女性が女性として踊る「女の踊り」の追及を目標としており、当時の社会情勢として外国の文化へ目が向きがちであった時代に、自国の文化に目が向いていたことである。そこには、母藤間政弥と、父十五代目市村羽左衛門の影響があったことと、フランス人のクォーターという生まれ持った国際性のためと言えよう。

第一章では、新舞踊運動にまつわる歴史と、先述の女性舞踊家たちの活動を挙げ、それぞれの信念と、当時のニーズを知り、なぜ徳穂に着目したかを論じている。

よって第二章では、徳穂が行った舞踊活動（春藤会、夫妻会、定式舞踊会、アヅマカブキ、三趣の会・徳穂の会、をどり座）を詳しく考察し、そこから窺える徳穂の舞踊観を探った。

徳穂の舞踊には、その生い立ちが、教養、精神性、作品を踊る上での糧に繋がっており、切り離せないものとなっている。また、母政弥、父十五代目羽左衛門、二番目の夫となる藤間万三哉も欠かせない存在であるので合わせて記している。

その舞踊活動、舞踊観を知ったうえで、本大学で開催した博士リサイタルでの実践研究の目的と結果を論じたのが第三章である。博士リサイタルは、一年次と二年次で二度開催している。

第一回では、徳穂の女の踊りの集大成とされる長唄《娘道成寺》と、道成寺から派出した《鐘ヶ岬》をモチーフに創った新作《五障の桜》を上演することで、「型」の重要性と、「振」に込められた感情がいかにか普遍的であるかを感じ取った。また、新作にモダンダンスの演者を用いることで、日本舞踊独自の表現方法を顕著にした。さらに、《娘道成寺》がなぜ徳穂の女の踊りの集大成といわれたのか、その過程を推測した。

第二回リサイタルでは、素踊りの長唄《島の千歳》と、歌舞伎舞踊である清元《落人》を演じ分け、徳穂の求めた「女の踊り」と「女形」の表現の違いを自らが表現することにより、なぜ徳穂は女性ならではの舞踊を求めたのかという過程を探った。それらを実際表現することで、女の踊りは女性にとって必要なものであり、それには女性特有の曲線的なしなやかさが出るように、衣裳、鬘、化粧法など全てにおいて、女性美の追求を考えていかなければならないことを知った。徳穂はそれを「吾妻ごのみ」という一つの形で確立している。吾妻流の作品の中でも「吾妻ごのみ」が十分に生かされている舞踊作品は、長唄《娘道成寺》、長唄《島の千歳》、長唄《鷺娘》である。

第四章では、これまで述べてきた全てのことを踏まえ、現代を生き、日本の伝統を担う一端である論者が、今後どのようにその思想を受け止め活動していくか、また本大学で学んだ意義を見出した。そして、古典芸術とは、伝統を踏襲し革新を備えたものであり、日本舞踊は過去から未来に継続する日本人の心として考えた。

この研究を通して、吾妻徳穂における娘形の確立は、日本舞踊において女性美を究極に追求した舞踊技法と、吾妻ごのみという日本舞踊の視覚的美の形式の両者を確立するに至り、新舞踊運動を基盤として成立した古典作品に革新をもたらしたものであるとの結論に導いている。

(総合審査結果の要旨)

2月18日に本学奏楽堂において行われた博士リサイタル

演目は 清元 「梅の春」 長唄 「鷺娘」 の二番

梅の春は相当の技術を要する御祝儀曲の代表格であるが、古典舞踊の基本を忠実に守りながらも一歩踏み込んだ演技をみせ格式高い舞台を作り上げた。鷺娘は吾妻流に伝承されている振付で演じられた。従来の歌舞伎舞踊と一線を画した故吾妻徳穂師が生涯を通じて確立した型をよく研究し舞台に体現した。実技においてはリサイタルの難曲に正面から向かう姿と努力が清々しく将来に期待出来る優秀な人材となるであろう。

論文

吾妻流に至るまでの歴史を細部に渡り調べ上げ、徳穂が独自の舞踊の方を創り上げていく経緯を年代別に作品と照らしながら考察している。膨大な資料の中からここまで纏めた努力は認めるが、膨大なゆえに曖昧になっているディテールも多いように思える。構成も含めて多少の手直しの必要があると思う。

協議の結果、総合成績は合格とする。